

大阪きょうだいの会例会「きょうだいカフェ」へのお誘い



「親は半生、きょうだいは一生」という言葉が例会の場で度々でてくる。人生85年と考えたら、親は障害児者のいる家族との出会いまでの人生(約25年)+障害児者のいる家族との人生(約60年)、子(本人・きょうだい)は障害児者のいる家族との人生(約60年)+親亡き後の人生(約25年)ということになる。

「障害」という言葉がスティグマ(社会的烙印)として働く世の中で「障害児者のいる家族」には絶えずネガティブな眼差しが注がれ、時には「美しい家族愛」の物語が語られる。その時々様々な体験や複雑な感情にフタをして頑張っていると厳しい日々の暮らしの中で追い込まれ、許容量を超えると「自分を大切にしたい」「人間らしく生きたい」という気持ちが萎えてくる時もある。問題を独りで抱え込み、世の中から

孤立してしまい、必要な時に「助けて」とSOSを出せなくなる。これは親も、障害のある本人も、きょうだいも同じだと思う。

大阪きょうだいの会の例会は、障害児者のきょうだいとしての自分の生きづらさ・悩み・不安などを仲間に話し・聴いてもらう場、自分の生き方を確かめる場として開催している。「自分の感情を吐き出す場」が最低限必要なのだと思う。

ライフサイクルに沿って「きょうだいたちの言葉」を整理すると下記ようになる。障害の種別・状態、家族構成、年齢、性別、職業などで「きょうだいの語り」は様々に変化するが、言葉の奥底には「自分は何者なのか?」という問いが共通してある。

【子ども時代(0歳～15歳)】「親を独占する」「甘える」「駄々をこねる」「自分の要求を通す」など、「自分ファースト」(自己中)なのが子どもの本当の姿だが、親の態度が自分と障害のある本人との間で異なるときょうだいの心の葛藤が大きくなる。姉=母親代わりを、兄=父親代わりをやらされる。弟・妹=甘えん坊なのに家庭生活では自分が姉や兄よりも上になってしまう。家庭内役割の混乱が起こる。「子どもらしさ」を抑えて自己主張を我慢すると、家庭内での「自分の居場所」が分からなくなりどうしたらいいのか迷ってしまう。気持ち(自己肯定感)がゆらぎ、自分に確信を持てなくなる。

【高校生(15歳～18歳)】小中学生時代よりも生活圏が広がる。校区を離れ自分の家族のことを知らない友だちとの出会いが、自分の世界を広げる。同時に人生についての悩みも深まる。自分の進路に迷い、思い悩む。将来の兄弟姉妹の世話など特有の心配事が絡んでくる。子ども時代から医療・福祉関係の仕事に触れる体験が多く、親の不安や期待をいつの間にか感じとっている。

【青年期(18歳～30代)】「自分だけが幸せになっていいのか?」・・・、きょうだいの強すぎる責任感(使命感)が自らの生き方を狭めていく。恋愛・結婚・出産に対するためらい。結婚を意識してつきあい始めても、なかなか本人のことを言いたせない。自分の家庭第一で考えるが、「親亡き後」の不安がいつも頭にある。実家の近くに住む。転勤のない職場を選択する。医療・福祉関係の仕事に就ききょうだいも多い。

【成人期(40代～50代)】親の病気や介護などに向きあう。親の相談相手になることも増えてくる。親に代わって本人の世話をすることがでてる。自分の家庭でも家族の病気や介護の問題などがでてる。「介護離職」を考えはじめることもある。

【高齢期(60代～)】「親亡き後」が現実になる。親に代わって本人の保護者となる。同居は難しい。自分も高齢になり、健康上、生活上で様々な問題がでてる。「きょうだい亡き後」の不安も抱えている。親と高齢の本人の介護、死別などに向きあう。きょうだいとしてのアイデンティティ(自分自身感)のゆらぎを感じることもある。

◀ 例会開催日 ▶

●開催日時=原則奇数月の第4日曜、13:15~16:45

【2019年】第51回例会=5月26(日) / 第52回例会=7月28(日) / 第53回例会=9月29(日、第5日曜)
/ 第54回例会=11月24(日) 【2020年】第55回例会=1月26(日) / 第56回例会=3月22(日)

* 例会の後の「居酒屋交流会」(自由参加)も恒例開催

●会場=国労大阪会館2階会議室(大阪市北区錦町2-2、JR環状線「天満」駅から徒歩5分、☎=06-6354-0661)

●対象=原則18歳以上のきょうだい限定(クローズの会)

●参加費=1,000円(会場費+資料代・通信費)

●参加申込=運営の都合上、電話またはショートメールで事前にお知らせいただくと助かります

<連絡先> 大阪きょうだいの会 世話人会・事務局(溝上光邦)

〒578-0961 東大阪市南鴻池町2-11-3、TEL/090-2384-9368